第２回「古典の日」フォーラム美しき愛知　テキスト１

『武家の文物と源氏物語絵』　尾張徳川家の伝来品を起点として　　輪林書房　2012 年

編者　高橋　亨・久富木原　玲・中根　千絵

第２回「古典の日フォーラム　美しき愛知」
今から 17 年前、「古典の日」制定の年、愛知県立大学の科学研究費補助金基盤研究（Ｓ）「戦（いくさ）に関わる文字文化と文物の総合的研究」の成果のまとめとして企画された、論文集『武家の文物と源氏物語絵―尾張徳川家所蔵品を起点として―』が、高橋亨氏、久富木原玲氏、中根千絵氏を編者に愛知を中心にした 24 名の研究者により発行されました。本は、『源氏物語』絵、古典書、工芸品、書などから『源氏物語』が武家に浸透する経緯や、家康はじめ、戦国武将たちの思惑も読み解いている。公家の文化との対立ではなく、武士は、むしろ積極的に取り入れ『源氏物語』から学んでいました。本書から主観を交えて適宜に抜粋しここにご紹介いたします。
高橋亨アドバイザーによる清原雪信という女性絵師（江戸前期の女性絵師）の章を、私達に重要な要素としてあわせてご紹介いたしました。

古典の日フォーラム 美しき愛知
企画・舞踊家　　市川櫻香

●『源氏物語』は中世以前から必読の教育書として位置づけられていた。
公家と武家
第一章　近世武家女性の源氏絵享受　　徳川美術館学芸員　執筆　　吉川美穂
一、武家の源氏絵享受
「中世の武家においても斯波義将（しばよしゆき）（１３５０～１４１０）が子孫への家訓として遺したとされる『竹馬抄』に「尋常式人は、かならず光源氏の物がたり、清少納言が枕草紙などを、目とどめて　いくかへりも覚え侍べきものなり。なによりも人のふるまひ。心のよしあしのたたずまひをしえたるものなり。それにて、をのずから心の有人のさまを見しるなり」」

●戦国時代『源氏物語』は、信長が謙信へ源氏物語図屏風を贈り、秀吉が源氏物語を書写させています

「秀吉が天正十五年（１５８７）に述臣に『源氏物語』を書き写させた記事（『兼美卿記』）や、大村由己・宇喜多忠家ら秀吉の御伽衆。豊臣秀次ら豊臣家周辺の武将を中心に源氏を享受が盛んになっていたことがわかる」

「徳川家康もまた『源氏物語』に関心を持った１人であった。慶長 19 年（1614 年）6 月～（中略）家康の 3 か月に及ぶ源氏享受、大阪冬・夏の陣で 1 年近く中断を余儀なくされたが、再び慶長 20 年（1615 年）7 月には、二条城で集中的に源氏享受が行われる。7 月 5 日には公家衆に「源氏物語抄」の仮名をつけさせ、九には、冷泉為満が持参した家蔵の定家自筆「源氏物語億入り」を閲覧した。(中略) 二条城の数寄屋で行われた「帚木」の講釈は、襖を隔てて女房衆も聴聞に及んだ」

「「源氏」を本姓とした家康が大阪の陣の勝利により自身のゆかりを象徴する宝器として国宝『源氏物語絵巻』を手中に収め、『源氏物語』の本文や注釈書・絵巻類を収集・管理することにより「読み」の独占を企てたとする見解が呈されている」

●初音と明石

三、婚礼調度と源氏絵

「婚礼との関りを持つ源氏絵の最たるものとして、絵画でこそないが、蒔絵の調度品である国宝「初音の調度」（注：徳川美術館所蔵）が挙げられる。寛永 16 年（1639 年）9 月、徳川三代将軍家光の長女千代姫が数え年 3 歳という幼さで、尾張家二代光友に嫁した際に持参した婚礼調度の一群である。」

●「幼くして嫁いだ千代姫へと宛てたメッセージと解すことができるのである。」

「初音蒔絵調度は、明石の君が、実の娘である明石の姫君に宛てた和歌「年月に松にひかれてふる人に今日の鶯の初音聞かせよ」の歌意を意匠化した調度で、その和歌の文字を葦手書きに散らし（注：平安時代に行われた書体の一つ。水辺の光景を描いた絵に文字を葦や鳥などに絵画化して散らし書きにする書き方）珊瑚や金銀の彫金を交えた精微な蒔絵であらわす。（中略）　「年月を・・・」の和歌は、表面的には　（中略）正月のめでたさを詠うが、実は「年月をあなたに会える日を待ちわびて過ごす私に、せめて新年最初のお便りだけでもよこしてください」と、我が子と離れて暮らす明石の君の切実な思いを詠んでいる。（中略）家の繁栄のため、幼い頃に親元を引き離された明石の姫君の境遇は、千代姫と相通じる。千代姫は家光が 34 歳にして誕生した待望の第 1 子であった。」

「千代姫が『源氏物語』を理解できる年齢に達した時、単に物語の筋を理解するだけでなく平安時代の菅原孝標女が園登場人物に憧れたように、明石の姫君に自身を投影し、幼くして別れた母、明石の君を、自らの両親へと読み返して物語の世界に仮託された愛情、惜別の思いなどを感じとっただろうことは想像にかたくない。ちなみに、徳川美術館には、千代姫が後年したためた「源氏物語抜書」所蔵されている。その流麗な筆跡を見るとき、千代姫が「初音の調度」に込められたメッセージを理解し、「姫君様」の尊称に恥じることのない教養と自負を兼ね備えた女性へと成長した姿を思い浮かべることができよう」

● 伝授　九条稙通（くじょうたねみち）から松永貞徳そして山本春正へ

江戸時代に入り、『源氏物語』が広く読まれるいきさつに師弟の伝承があります。

『絵入り源氏物語」の編者山本春正の巻末の跋文を清水氏の口語訳、思いは今も伝わります。

第二章　「絵入り源氏物語」の出版と普及　　帝塚山大学教授　　執筆　清水婦久子

「江戸時代前期の地下の文化人、松永貞徳（まつながていとく）は、1582 年に 12 歳の若さで『源氏物語』を、九条稙通（くじょうたねみち）から伝授された。」と紹介している。

（戦国時代から桃山時代の古典学者、公家）

源氏物語は、諸家の本によって異同があり清濁もわかりにくいので読みづらくなっていること

は非常に残念である。私は、若い頃から和歌の道を志していたので、俊成卿の詞（筆者注「源氏見ざる歌詠みは遺恨のことなり」）に従って源氏物語に心をそめた。解釈できない所は、（松永貞徳）先生から直接講義を受け、朋友に疑問箇所を教わり、ほぼ慷慨（こうがい）を会得した。数本を集め、諸抄（注釈書）を参照して校訂して、清濁と句読点を付け、また誰の会話か誰の記事か等について傍注を施した。古来からある絵図は物語や歌の最も印象的な箇所を描いているが臆見によって更に図を増した。僭越の罪は逃れ難いが、図で事柄を知り、事柄で意味を理解できるなら婦女子の助けぐらいにはなるだろうか。源氏物語は和歌を志す人の必読書である。今、ここに山路露、系図、目案等を添えて上梓（じょうし）し、広く世に伝えたい。これは利益のためではなく、志を同じくする人を得たいからである。なお誤謬（ごびゅう）は多いかと思うが、博識の人々よ、正して下されば幸いである。

慶安３年仲冬、山氏（山本）春正謹跋。　　（跋文・大意）

●雪信という女性職業絵師

第二章　源氏物語をめぐる文物の諸相　江戸前期の女性画家清原雪信の『源氏物語画帖』

「古典の日フォーラム美しき愛知」アドバイザー　Ｇｅｎ庵　高橋亨

「清原雪信画「源氏物語画帖」が尾張徳川家に伝来している。江戸前期の女性画家である雪信の描いた源氏絵各巻一図の絹本色紙五十四図に、公家など五十四名の寄合書きよる詞書を合わせて画帖に仕立てられた作品である。」

「雪信は、王朝の歌人や作家の女性群を多く描いているが、その中で自分を清少納言にみたてていたふしがある。架蔵の「王朝作家図屏風」はそうした視座からも興味深い作品である。

「王朝作家図屏風」と仮に名づけた作品は、六曲一隻の屏風の各扇に紙本一図を貼り、向かって右から、清少納言、江口遊女、遍照、業平、貫之、紫式部と推定できる。清少納言とみられる第一扇右下に「清原氏女雪信筆」の落款と朱印が有る。この６人の図は３つの対から成る画面構成と見ることができる」

「第一の組み合わせは、右端の第一扇と左端の第六扇二人の王朝女性像で、清少納言と紫式部を向き合わせたと考えられる。第六扇の紫式部図は、松の木の下で書物と手紙らしきものを置いた文机に右手を置いて坐り、左手に文を持って読む。」

「第二の組み合わせは、第二扇の江口遊女と遍照で向き合ったこの二つの絵は、そのモチーフから確定できる。」

「第三の組み合わせは、第四の川に散り流れる紅葉を対岸から見る貴族の男と従者に童、これと背中合わせで反対を向く、第五扇の、扇をかざして対岸の桜を愛でる男と従者の絵である」

「雪信の絵の魅力は、おおらかで気品のある彩色による細微な女性像や景物と、余白を生かして遠近のある水墨による没骨の山水との組み合わせにある。その天性の技法は、探幽に学んだ最初期から習得していたともみることができる」

■懐古と優婉

前時代の女性たちのふくよかな、柔らかさを受け継ぎながら、緩やかな中に、溌溂さも感じます。王朝文化が、武家へ、うつろうとする時代のはざまには、公家文化も、武家文化も、影響を受け合い、柔らかな明るさを観じます。新しい時代への期待もあるのかもしれません。公家文化と武家文化、どちらも強調されることなく描かれています。

『信長公記』津島での、風流おどりに見る

天人の女装をして舞った武人や、秀吉の能狂いにも、彼らの中に優婉を求める感覚を想像することができます。信長や秀吉が狩野永徳を重用した。永徳の「唐獅子」の強く逞しさの一方、永徳の弟、狩野長信の「花下遊楽図屏風」に見る優婉な優しい情感。中世から近世にうつる時代を想像できその人たちのこころの澄んだ清らかさが現れています。「桃山の美とこころ」著者倉澤行洋氏は本の中で、誰もが持つ母なるものを求める志向が現れていると書かれています。(私どものホームページ（ときどき２０２０）でお読みいただけます)

考えてみますと、優しきものを思い慕う「懐古」のこころには、優婉な趣きが生まれます。優婉とは、人のこころを、わかろうとする「こころ」であり、紫式部の描いた「もののあわれ」です。

懐古するこころ

高橋亨アドバイザーから「『源氏物語』は性別ではない「女文化」という文化です」

とお聞きし『源氏物語』が、世界中に愛される理由に「女文化」の原初の「母性」を想像いたします。

『源氏物語』を手にすれば、その一つずつのエピソードが「お能」のようです。懐古する　優しく、温かな「女文化」の時間に、浸ることは、戦国武将も同様、現実の壮絶から拭われ、母なる懐にもぐる、そんな気分に染まることと「こころ」を育てることは遠く隔たってはいないと観じています。

『武家の文物と源氏物語絵』尾張徳川家の伝来品を起点として　　より抜粋

執筆者　吉川美穂　清水婦久子　高橋亨

あとがき　　日本の伝統文化をつなぐ実行委員会

この地域は、家康の文化構想を支えた文物をはじめ、多くの古典書の宝庫です。
家康の九男、尾張徳川初代藩主義直とその一流のもとで、父家康の遺した多くの文物
その後の収集により、時代々に知恵を読み解く遺産が保存されています。
愛知が世界に誇る地域文化財は、この「古典」を保持し続けていることです。
　今後も「古典の日　フォーラム　美しき愛知」の開催を皆様と継続し
古典から学ぶ機会を広げて参りたいと存じます。皆様には引き続き宜しくお願いいたします。

協力　源氏物語アカデミー

次回　第３回「古典の日フォーラム　美しき愛知」予定　名古屋能楽堂

令和七年　11 月 2 日（日）　/　3 日（祝・月）

ご案内郵送ご希望の方

伝文友の会（伝統文化をつなぐ友の会）　年間３０００円会費

①ご希望者には、催しのご案内を送付いたします。

特典　　催し物（古典の日フォーラム美しき愛知・文化財トーク・伝統芸能鑑賞）
特別席へご招待いたします。懇親会のご案内をさせていただきます
主催事業チケットを、割引でご提供いたします。

お名前・住所・連絡先

「古典の日」案内希望と書いて　左記の方法でご連絡ください。

・ハガキ　名古屋市中区千代田三丁目十番三号
・ＦＡＸ　052（323）4575
・メール　mkabuki2@gmail.com

日本の伝統文化をつなぐ実行委員会